

2012年(平成24年)3月14日 [水曜日]

最終ログイン 03/14 14:26 - タイムアウト個別ID : hassyo084

設定変更

ログアウト



よんなな

47行政ジャーナル



文字サイズ:

サイトマップ

キーワード

Go

詳細検索

電が関ファイル 地域ファイル 最新ニュース 発表資料 人事情報 選挙 予定 特集 おくやみ 企画記事 マイナビ ふるさと発信

トップページ > 企画記事 > 記事詳細

記事詳細 企画記事(新政策)

印刷用

保存用

桜と外交官 ~ワシントンの桜100年に寄せて 駐米大使 藤崎一郎

2007/03/20 13:56 東京 (47行政ジャーナル)

外務省の桜並木が、東京の春の名所のひとつになって久しい。これは東独、ポルトガルなどの大使を勤めた谷盛規氏が、昭和30年代末に官房の会計課長だった時、思い立って、植えたものと聞いた。谷氏は、この仕事にたいへん打ち込んで、自ら千葉や埼玉の造園業者に足を運び、苗木を選んだということである。そういう仕事ぶりが必ずしも尊ばれない官僚組織の中では異色の存在だったらしい。私もこの話をかつて聞いたとき、なぜ桜の植樹にそこまで感じた。しかし、思えば当時の多くのことがすでに歴史のかなたに霞んだ今日、桜は、毎年見事に咲き続けている。私もずっと後に同じ会計課長の職についたが、あれやこれやで走りまわり、とてもあのような仕事は残せなかった。もっとも桜に打ち込んだ外交官は、実は谷氏だけではない。



ポトマック河畔の桜並木、米国ワシントンDC

東京からワシントンに桜が贈られて、ちょうど100年になる。ポトマック河畔を美しくしたいと考えたタフト大統領夫人に、友人のシドモア女史が日本の桜の植樹を薦め、これを聞いた高峰讓吉博士が日本からの寄贈を申し出て、結局、尾崎行雄東京市長が贈った話である。この経緯については、日米両国の新聞、書籍に、いろいろと異なることが書かれている。本当のところ、だれが何をしたのかということに興味を感じ、古い文書をひもといてみた。米国政府、外務省、東京市、都などの資料である。これらを読むと「藪の中」が、かなりすっきりしてきた。そして、歴史の裏方として、昔の外交官たちが、桜の植樹に力を注いだ姿が浮かび上がってきた。後輩が先輩の活躍ぶりを書くのは、やや面はゆいし、最近、黒子は黒子という風潮があるのは知っているが、あまり知られていない話もあり、寄贈100年の機会に記してみることにした。

20年にわたる思い、高峰博士の一言で急展開

まず東京市からの公の贈り物とすることに功績があったのは、水野幸吉ニューヨーク総領事である。この人は、日露戦争時、旅順攻撃の支援や在留邦人保護で貢献したといわれる。紀行作家のシドモア女史ともつき合いがあった。同女史は、長年にわたって日本で領事をしていて兄を何度も訪ね、向島の桜を見て感激してワシントンの当局に20年にわたり日本の桜をポトマック河畔に植えるように働き掛けていた人物である。風土の違うアジアから木を持ってくることについて当局者は消極的で、「サクランボをとり子供が木に登ったら河に落ちて危ない」と反対した。女史が「これはサクランボがならない種類の木です」と答えると、「そんな役に立たないものを植えてどうするのか」と言ったらしい。洋の東西にかかわらず、いかにもこうした役人が言いそうなセリフを女史が回顧している。



高峰讓吉

水野総領事が所用でワシントンに出張したとき、アドレナリンの発見者でニューヨーク日本人社会のリーダーの高峰讓吉博士もちょうどワシントンにあり、博士もシドモア女史と旧知だったので3人で集まった。1909年4月8日のことである。シドモア女史が、「タフト夫人がポトマック河畔を美しくしたいと1週間前に言い出したので日本の桜を薦めたら、ちょうど前日の7日に夫人が同意して桜を集めるように指示が出たところ」と打ち明ける。

高峰博士は、かねがね移民排斥など米国内の反日感情の高まりを懸念しており、日米友好のシンボルとしてニューヨークのハドソン河畔に桜を植えることについて同市の当局者の説得を試みてい

TPPシンポ(第1回、名古屋市)の詳細掲載

全国地方新聞社連合会と株式会社共同通信社が2月19日に名古屋市で開催した第1回「環太平洋連携協定(TPP)をともに考える 地域シンポジウム」の詳細を「共同通信シンポジウム・講演から」に掲載しました。政府の取り組みの最新情報として当日、配布された説明資料も添付してあります。ご利用ください。
2012/03/13

高村薫さんの講演詳細掲載

作家の高村薫さんが、共同通信大阪ささざき会で講演しました。みずからの文学、時評の立ち位置について語った上で、政治・経済に行き詰まり東日本大震災からの復興も停滞する日本の深刻な現実を直視し、正しく悲観した上で、奮起する必要性を訴えています。講演詳細を掲載しました。
2012/03/12



早咲き河津桜が見ごろ 相模灘に続くピンクの帯

共同通信記事DB(過去10年)

>>詳細検索

キーワード

Go

人事データベース

>>詳細検索

人名、役職、部署

Go

政府・都道府県・政令市 予算資料

補助金・交付金一覧

元気！ふるさと発信

一覧

「福島第一原発 風下の村」を出版した写真家の森住卓さん

「フクシマが自分の最後の仕事、ずっと追いつけなければ」。昨年3月、東京電力福島第1原発に向かう車の中で、原子炉建屋の爆発を伝えるラジオニュースを聞きながらそう覚悟を決めた。以来、現地入りは1...
[記事全文]



一覧

電力市場の自由化不可欠 レスター・ブラウン代表

米国の著名な環境思想家、レスター・ブラウン・アースポリシー研究所代表は、日本のエネルギー政策再構築のため、各国で起きている変革に目を向けるべきだ



た。そこで、ただちに「では自分が1000本を贈りましょう」と申し出たらしい。途中で2000本に増やしたとシドモア女史は書いている。これに対し水野総領事は、せっかくの機会であり、個人からではなく日本の首都、東京市長の名で贈るべきであると主張した。

シドモア女史は4月10日には、タフト夫人に取り次ぎ、タフト夫人は「喜んで東京市長からの贈り物を受ける」と述べた。20年間も進んでいなかった桜植樹の話が、大統領夫人の鶴の一声のおかげでとんとん拍子に進むことになった。米国内で調達できる桜の本数が限られていたし、予算面もあり、渡りに舟ということだったようだ。

水野総領事は高平小五郎駐米大使にもこの経緯を報告したが、同時に東京の小村寿太郎外務大臣に東京市長から寄贈することを6月2日に進言する。なお、「もし東京市長において寄贈の予算を工面できなければ、名義は市長とするがニューヨークの日本人社会で費用負担しよう」と高峰博士が呼びかけ、賛成を得ているという総領事の報告も残っている。このいきさつから「東京市長は、実は名義だけの関与だった」とシドモア女史が思い込み、米国の一部関係者に伝わっていったのではないと思われる。



小村寿太郎

駐米大使の当惑



ワシントン恒例の桜祭り、咲き誇る桜を愛でる人々、米国ワシントンDC（2010年3月）

次は高平小五郎駐米大使である。高平大使は、水野総領事がシドモア女史から桜の話聞いたのとほぼ同じ頃に、直接、タフト夫人に会っている。大使は、「大統領夫人が桜植樹に関心があれば種苗の日本からの寄贈について“周旋、に尽力しましょうか」と持ちかけた。タフト夫人は「まずは米国内で探してみよう」と答えたので、大使は押しつけになってはいけないと思い、引きさがったという。

大使は、水野総領事がシドモア女史からの話に基づき、外務大臣に東京市長からの寄贈を進言したと聞き、当惑する。管轄外のニューヨークの総領事が一人であるシドモア女史からの話だけで公の寄贈にかかわる話を本国政府につなぐのはおかしい、まず駐米大使である自分がノックス國務長官に確認すべきであるという、いわば筋を通した立場をとる。高平ノックス会談において、ノックスは「自らタフト夫人に確認させてほしい」と述べた。長官から、大統領夫人に確認の上、7月12日に日本に寄贈をお願いするとの確認が得られた。これにより、寄贈は正式に国と国のルートに乗ることになった。これには重要な意味があり、植樹が行われた後、樹木の専門家集団を擁する米国立公園局が100年後の今に至るまで丁寧に維持管理することにつながった。ノックス長官の返事を待っていた高平大使は、さっそく水野総領事の進言の通りで差し支えないという7月13日付けの意見を小村大臣に送る。

タフト夫人が高平大使の“周旋”の申し出にはあまり反応を示さず、シドモア女史からの取り次ぎには前向きだったのはなぜだろうか。高峰博士に端を発する1000本単位の寄贈という気前の良さが利いたのではないと思われる。この間、当然のことながら大使と総領事の間では若干の軋轢が生じたようで、役人というのはいつの時代でも同じだなと感じる。ちなみに水野氏は1914年、北京で参事官として勤務している時、突然、読書中に客死した。一方、高平氏は枢密顧問官などを歴任し1926年亡くなった。

害虫で失敗、ユーモアがピンチ救う

舞台は東京に移る。小村寿太郎外務大臣の下の石井菊次郎外務次官は、東京市に検討を依頼する。石井次官はのちに駐米大使、外務大臣を歴任するが、駐米大使時代にランシング國務長官と結んだ対中権益についての石井ランシング協定で有名である。尾崎行雄市長はポーツマス条約締結につきアメリカに世話になったという気持から東京市参事会に諮り、1909年8月25日の決議で予算支弁にこぎ着けた。しかし東京市は桜の輸送費までは持てなかったので外務省が日本郵船に働きかけ、同社の近藤廉平社長の裁量でシアトルまで無料で輸送した。近藤社長と外務省の萩原通商局長の間の書簡が残っている。陸路の費用は米側が負担した。



尾崎行雄

しかし、この時の桜の寄贈は、失敗に終わる。ワシントン到着後、検疫で害虫が大量についているのが発見されたからである。米側責任者のコスビー大佐はすべて焼却せざるを得ないと1910年1月26日に尾崎市長に書簡を発送した。米国は、日本が面子を失い反

という。 × × 一日本のエネルギー政...[記事全文]

一覧

大震災1年特集

大震災関連「日本の防災力」「復興への提言」ほか随時掲載

大震災連載「日本の試練」100回突破

共同通信シンポジウム・講演から

一覧

蔡英文落選でバンジー、野党議員が日本でFLY[社会]

関東化学が第2工場、生産能力倍増へ[化学]

日曜TV政治討論 新政策 海外都市の鼓動
ニュース百科 スキル講座 実務演習

自治体トップアンケート

都道府県議会日程

被災地応援に1200人 12年度、自治体職員

ボーナスは軒並み前年割れ 春闘、大手が一斉に回答

年収94万円以上で加入 パートの年金で民主

首相と亀井氏、物別れ 消費増税の調整難航 人事異動の内示書と辞令書を廃止、山形県

RSSインデックス

発するのではないかと危惧したようだ。しかし、米国から通知を受けた際、日本側関係者が、「貴国では大統領自ら桜を処分する伝統がありますからね」と幼少時のワシントンが桜を切ったことを父親に告白したという話を引いてユーモアを交えて応じ、米側が安堵したという話もある。結局、急ぎすぎて自らきちんと検査しなかった日本側の落ち度であった。

ここからが大事である。国務省からは駐日米国大使館に対し「日米の学者が研究し、こういうことがないようにしっかりした体制ができるまで、日本側が再度このような試みをしないように働きかけよ、またニューヨークに桜を持ち込もうとしている高峰博士にも事の顛末を知らせ、同じことが起こらないようにすべきである」との訓令が出ている。アジアの国から見たこともない虫がくることに米国内で心配、反発があることへの配慮があったのだろう。

特別栽培の桜で再挑戦



ワシントン記念塔と桜、米国ワシントンDC

ところが日本側は、ただちに再送に着手するのである。これを主張したのは、高平大使の後任の後任にあたる内田康哉大使であった。彼の名は外相時代に国を焦土にしても満州国権益を守るべきであると国会答弁した「焦土外交」とすぐ結び付けられるが、外相就任期間は7年余と最長記録を保持している。内田大使は、米側が焼却したのはもっともであり、もう一度試みるべきである、その際、害虫がないようにすべきであり、また米国内の運賃も米側でなく日本側が持つべきであると、早くも1910年1月31日に本省に進言している。

これが効いて東京市は早速、特別に栽培した桜をつくることにしたと東京都の資料に書かれている。もし、1回であきらめていれば、日本は、ヘンな贈り物をしようとしてうまくいかなかったということだけが残ってしまっただろう。なお、第1回の寄贈に携わった造園業者は、当初は自らの責任を否定していた。しまいには、1000本の無償提供を申し出たが、東京市は受け取らず、1910年4月21日、あらためて市参事会決議で運送費用を含め予算を措置した。桜の権威、船津静作翁、三好学東大教授などの指導を得て農商務省の農事試験場で特別に虫がつかないように丁寧に栽培が行われた。

ついに届いた3000本の桜

こうしてワシントンにあらためて3000本余の桜が届き、1912年3月27日、記念の植樹をおこなったのは、タフト大統領夫人と当時の珍田捨巳駐米大使の夫人いわである。そこでポトマックの桜に携わった外交官というと珍田大使の名がでてくるが、実は同大使は植樹の前月に着任したばかりだった。

もちろん、表舞台の役者は、あくまでタフト夫人、シドモア女史、高峰博士、尾崎市長である。タフト夫人とシドモア女史が知己であったこと、同女史と高峰博士の間に親交があったこと、高峰博士が寄贈のイニシアチブをとったこと、東京市長が国際派の尾崎氏であったことなどが鍵となった。個々人の強い意思といくつかの偶然が重なって成功に結びついたのである。なかでも尾崎市長は贈り主として有名で、まだ占領下の1950年、米議会に招かれ桜寄贈について感謝の決議を受けた。自らもポトマックの桜にずっと強い思い入れを持ち、「ポトマックの桜をながめ月に酔い雪をめでつつ我が身終へなむ」とまで詠んでいる。同時に「議会の父」「憲政の神様」とよばれるほど国会議員として長く活躍してきた自分の名が、結局はポトマックの桜との関係だけで人の記憶に残ることになってしまうとすればさびしいと述懐したという話もある。



ふじさき いちろう 1947年生まれ。鹿児島県出身。69年外務省入り。北米局長、外務審議官、在ジュネーブ国際機関日本政府代表部大使を経て、2008年から駐米大使

しかし、世上、あまり名前は出てこなくても、公の寄贈とすべきであると主張した水野総領事、きちんと国と国のルートに乗せた高平大使、1回の失敗に懲るべきではないと進言した内田大使の存在がなければ、私たちが今日見る美しいポトマックの桜はなかったろう。また公文書の中には松井慶四郎臨時代理大使(後の外務大臣)、埴原正直書記官、斎藤博外交官補(いずれも後の駐米大使)などの名もでてくるが、これらの人も現場の折衝でいろいろ腐心したのである。

毎年、満開のポトマックの桜の下を歩きながら私は、往時の先達の先見の明、苦労に思いをいたし、敬意を新たにする。

[ご紹介\(PDF\)](#) | [概要\(PDF\)](#) | [ご利用の手引\(PDF\)](#) | [利用規約\(PDF\)](#) | [お問い合わせ](#) | [サイトマップ](#)

47

47ニュース関連記事 <PR>商品速報！全国各地の新品と新技術を速報中

米、ゼロ金利政策維持 FRB、原油高を警戒 [共同通信]
米ワシントン州に砂塵嵐が襲来 視界ほぼゼロ、玉突き衝突も発生 [共同通信]



【関連動画】米ワシントン州に砂塵嵐が襲来 視界ほぼゼロ、玉突き衝突も発生

Powered by 47NEWS

47行政ジャーナル参加社・情報提供社一覧

- 北海道新聞 | 河北新報 | 東奥日報 |
- 秋田魁新報 | 山形新聞 | 岩手日報 | 福島民報 |
- 東京新聞 | 下野新聞 | 茨城新聞 | 上毛新聞 |
- 千葉日報 | 神奈川新聞 | 埼玉新聞 |
- 山梨日日新聞 | 信濃毎日新聞 | 新潟日報 |
- 中日新聞 | 伊勢新聞 | 岐阜新聞 | 北日本新聞 |
- 北國新聞 | 福井新聞 | 京都新聞 | 神戸新聞 |
- 奈良新聞 | 紀伊民報 | 山陽新聞 | 中国新聞 |
- 日本海新聞 | 山陰中央新報 | 山口新聞 |
- 佐賀新聞 | 熊本日日新聞 | 南日本新聞 |

- 四国新聞 | 愛媛新聞 | 徳島新聞 | 高知新聞 |
- 琉球新報 | 公職研 | NNA | 共同通信 |

47行政ジャーナルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright (C) 2007-2012 47(yonnana)Gyosei Journal. All Rights Reserved.